

Yuji Teramoto
寺本 雄二



例えばサイズより、獲り方にこだわる。自分にあつた楽しみ方を見つける。それが一番幸せな釣りだと思う。

僕が釣りと出会ったのは、小学校2年生の時に近所の兄さんに連れて行ってもらったフナ釣りだ。

人口50万人以上の世界の都市で唯一水道水源を地下水だけでまかなう「世界」の地下水都市と呼ばれる熊本県熊本市で僕は育った。近所には豊富な湧水や河川・湖等があり、当時の熊本の子供達は当たり前のように釣りや水遊びに親しんでいた。

釣りを覚えてからは自宅のそばに湖があつたおかげで、勉強もせずには毎日のように雷魚・ブラックバスを狙っていた。その頃からルアーでシーバスも狙えることは知っていたが、ポイントまでの距離の遠さから本気でシーバスを狙うことはできなかった。やがて大人になって行動範囲が広がり、お約束のようにルアーシーバスを始める。広大なロケーション、シーバスの強い引き、豪快なエラ洗いに魅了され、一発でこの釣りにはまった。

その中でも、僕に合ったのは河川でのシーバス。最大約4メートルという、日本有数の干満差を誇る地元熊本川の河川。釣りをすることで初めて知ったのだが、上げ潮での速い逆流でダウンクロスに流し込む釣りもできるような特殊な地域だった。水面の上下動は、動く時で時速約1メートル。シーバスの捕食スイッチは入りやすいが、あつという間に切れる。それどころか、ポイントに水がなくなるような場所も多い。

そんな場所でシーバスを効率よく狙うために身に付けたのがアップクロスの釣り方。シャローや深みなどの広範囲に居るシーバスを狙うのではなく、立体的なストラクチャーに捕食のために着いたシーバスを少ないキャスト数で食わせる方法に夢中になった。潮位と流れを見極め、「ここぞ」というタイミングでキャストし「弱りながらも頑張ってるベイト」を演出しながら、シーバスが捕食のために待っているポイントにルアーを誘導する。

潮位と流れタイミングを待ち、一投で決めた時の気持ちよさ。これが自分に合った釣りだった。速い流れの中のポイント、そこを狙って釣るためにどうしても元気の良い中堅クラスのヒット率が高くなるが、狙って食わせる楽しさが最高！

全国的にも有名な、メーターオーバーのシーバスが獲り易いと言われる熊本県。実際、良型と呼ばれるのは90cmからという変な土地。「90cm以下はセイゴだね」という、地元アングラー同士の笑い話もある。しかし、僕が獲りたいのは型ではなく、思い通りにヒットさせたシーバスだ。獲り続けていけば、型はいつか出るという考え方だ。

釣りの楽しみ方は人それぞれ。型にこだわるアングラーもいれば、友人と仲良くロッドを振るだけで楽しい人もいろいろ。皆それぞれの楽しみ方でゆつくりまったりと楽しんでいけば良いと思う。趣味なのだから。

ただ好きで続けてきた釣りという遊び。続けてきたことによつて、年齢性別・土地を超えてたくさんの友人が出来た。釣りをしていなければ、知り合つたことはなかつたらう人達もいる。

シーバスを始めた時に、昔バス釣りしていた頃の友人と再会したこともある。僕にとつて、釣りはなんなのだろうか？釣りをしていなかつたら、どうなっているのだろうか？食物連鎖の形をテレビ以外で見ることができただろうか。自然の美しさと恐ろしき、野生の強さと弱さを身をもって知ることができただろうか。四十歳を過ぎて、先輩や若い友人たちと夜明けまでバカ話なんてできただろうか。真冬の星の下で食う、カップラーメンの旨さに気づいただろうか。

若い頃の僕は独りが好きだった。独りで楽しめるから、釣りという遊びに夢中になった部分もあつた。

でも、長年釣りを続け、気づいたら周りにはたくさんの友人がいた。なんの違和感もなく、当たり前のようにその環境を楽しんでいる自分がある。釣りをしていなかつたら、今の自分とは全く違う人生だつたらう。そつちのほうが良い人生だつたのかもしれないが…(笑)

過去に戻つて釣りを知らない人生を選べるとしても、僕は間違いなくまたこの人生を選ぶ。そして朝までロッドも振らずに、たくさん仲間達とバカ話をする夜を過ごしたい。